
ヘタリアRPG

日本娘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタリアRPG

【Nコード】

N5508S

【作者名】

日本娘

【あらすじ】

いつものようにドイツの訓練から逃げ出し、のんびりしていたイタリア。

そんなイタリアのもとに慌てた様子の日本がやってきて世界に危機が迫っていると告げる。

戸惑うイタリアと日本の前に突然現れたのはたぶん世界征服？を企んでいる正直言って顔がやばいモンスターだった！？

まあなんだかんだで顔がやばくてもこのモンスターが敵だということにはかわりないので枢軸・連合の8人はコスブ……………じゃなくて戦闘服を身にまといモンスター討伐と行方不明となった一部の国達を探しに向かうのだった……………

この話は世界の危機を世界が救う物語である。

この小説は一部、残酷・グロいところがあると思われます。苦手な方は即刻リターンしてください。

そしてこの小説は国語の成績が悪い文章を書く能力が全くないバカでクズでカスなダメ人間が書いております。つまり読んでたって全然楽しくないというわけです。

そんな作者が技の名前とかを考えちゃってます。こんな作者ですからもちろん、ネーミングセンスが0というわけです。そこらへんは温かい目で見てください

まあ別に読んでやっても良いぜ！という神のようなお方はどうぞ楽しんで読んでくださいませ。

読んでくださった方はできれば感想等を書いてくださると嬉しいです……………

***第一話 すべての始まり* (前書き)**

RPGのよつでRPGじゃない意味不な内容ですw

*** 第一話 すべての始まり ***

イタリア「チャオ！！イタリアです！！この小説は作者の妄想ばかりです！苦手な人は読まないようにしてね」

イタリアはねっころがって太陽を見ていた。

イタリア「ヴェー……ドイツの訓練厳しすぎるよー……………」

イタリアアアアアアア！！

遠くから聞こえてくるドイツの怒鳴り声を聞きながらイタリアはのんびりと青い空を見ていた

イタリア「空は青いなあ……………あれ？黒い雲が……………」
青い空は黒い雲に覆われていった。

辺りがどんどん暗くなっていく。

イタリア「雨でも降るのかなあ……………。嫌だよ。髪の毛が大変なことになっちゃうんだもん」

……………アくん！！

……………リアくん！！

イタリア「ん？」

…タリアくん！！

イタリアくん！！

遠くから自分と呼ぶ声がだんだん近くなってきて、イタリアは体を起こして声の主を確かめた

イタリア「ヴェー？あれ？日本？」

日本が整ったきれいな黒髪をゆらしながら息を切らして走ってきた

日本「イタリアくん！！よかった……」

イタリア「日本？どうしたの？ドイツは？」

日本「ふせてください！」

イタリア「ヴェッ！！？」

日本はイタリアと一緒にその場に伏せた。

その瞬間、激しい光と風が辺り一面を襲った。

イタリア「うわあああああっ！！？」

日本「くっ……………！！」

しばらくして光と風がおさまった

イタリア「な……何が……」

日本「先ほど、私の家で世界に危機がせまっていることが判明されました。ドイツさんなどには連絡してありますのであとで合流しましょう」

イタリア「日本！説明してよっ！！何があったの！？」

日本「しかし今の光と風は一体……」

イタリア「日本っ！！聞いてる！！？」

日本「やはり地球に危機が……」

イタリア「おじいちゃんっ！！？人の話聞こうよ！日本はまだまだ若いんだから！！」

日本「はい？何か言いましたか？」

イタリア「何が起こってるか説明して？」

日本「はい………えーっと………あれ？なんででしたっけ？」

イタリア「にほんー……」

日本「とりあえず世界会議場に参りましょう。みなさんそこにいらっしやいます

——そうはさせない——

「「！！！！？」」

イタリアと日本の後ろには恐ろしい姿をした怪物が鎌を振り上げて

いた

***第一話 すべての始まり*（後書き）**

次回は戦闘です！

あといろいろすいません

見てくれてありがとうございます！..！

***第二話 最初の敵は弱いのがお決まり* (前書き)**

RPGの第二話です。

私は説明の力が欲しいです………

駄文です

第二話 最初の敵は弱いのがお決まり

イタリア「ヴェーッ！！？何コイツウウッ！？顔面がやばいよおっ
！！」

日本「イタリアくん、言っちゃいけないこと言ってます」

―おのれ……初対面で顔面がやばいなど………殺してやるっ！！―

敵は武器を振り下ろした。

日本はイタリアの手首を掴み、攻撃をギリギリかわした

日本「イタリアくん！敵、怒っちゃいましたよ！？なんとかしてください！」

イタリア「なんで俺なのー！？？」

日本は刀を抜いた

日本「イタリアくんは何か武器をもっていないませんか？」

イタリア「えーっと………白旗ならあ」

日本「それ以外でお願いします」

―よそ見などしてる暇があるか？―

日本「大丈夫です。こういう最初に出てくる敵は強そうなくせして

弱いんです。いわゆるカスです」

イタリア「なるほど！」

―なるほどじゃねえだろっ！！そういうことここで言っなっ！！！！―

敵はどんどん攻撃してくる。

日本はそれを余裕でかわし攻撃をしようとしていた

イタリア「武器ないな……」

イタリアは武器を探していて敵の存在を完璧に忘れている。

―忘れるなあっ！！！！―

イタリア「うわあっ！？」

日本「イタリアくん！！」

敵は完全に隙だらけのイタリアに攻撃をしようとした

イタリアは動けない

完全に逃げられない

日本「といやああああ！！！！」

日本は敵の背後から刀を刺した。

刀は左胸を貫通し、血が吹き出した

敵は倒れ、そのまま動かなくなった。

イタリア「……死んだの？」

日本「おそらく……」

イタリアは少し震えていた。

二人は吹き出した血のせいで服に赤い染みを作っていた。

日本はこういうことが慣れているように無表情で立っている

日本「とりあえずドイツさんたちのところへ行きましょう。」

イタリア「うん……」

イタリアは日本の後を付いていこうとした。

しかしイタリアはあることに気付いた

先ほど日本に殺された敵から何か黒い煙のような物が出てきた。

その煙は日本に向かってすごい速さで突進していった

イタリア「日本！！危ないっ……」

日本「！！！！？」

イタリアは白旗の棒の部分を何気に引っ張って見た

そしたら

棒が抜けた

棒が抜け、その中には鋭い刃が光っていた。

イタリア「えっ！！？なぜに！？とりあえず……………おりやあああああ！！！」

イタリアは黒い煙に切り掛かった

黒い煙は二つに分かれ、消えた

日本「あれは……………ていうかイタリアくん、それ……………」

イタリア「仕込み刀的な何か……………かな？そういえばドイツ、この前この白旗になんかしてたなあ……………w」

日本「（ドイツさん、ナイス！！）」

日本はドイツに心から感謝していた。

***第二話 最初の敵は弱いのがお決まり* (後書き)**

次回は全員集合!!
になるかも

読んでくださりありがとうございます!

***第三話 全員集合！*（前書き）**

全員集合！

キャラの口調がわからん

* 第三話 全員集合！ *

ドイツ「……………おそいな……………」

アメリカ「日本とイタリアになにかあったんじゃないかい!？」

中国「それは大変ある!すぐ助けに行くよろし!」

イギリス「待て!外は意味のわからない、はつきり言って顔面がヤバイ生物がうじゃうじゃといるんだ!!外は危険だ!」

ロシア「だったらなおさらじゃない?イタリア君と日本君は今その危険な外にいるんだから助けに行った方が僕はいいと思うなあ」

イギリス「それは……………」

フランス「素直に認めるよイギリス」今なら土下座すれば仲間にいれてやってもいいぜ?」

イギリス「黙れこのワイン野郎!」

フランス「んだとやるのか元ヤン!」

ドイツ「やめろお前ら!まったくこんな時に……………」

日本「みなさん、無事ですか!？」

イタリア「ドイツ……!! 怖かったよ……!!」

日本とイタリアが世界会議場に飛び込んできた

全員「……!!」

ドイツ「イタリア……!!」

日本「遅くなってしまい申し訳ございません。少々トラブルがありまして……」

イギリス「外の生物に何かされたのか!？」

日本「はい。まあ最初の敵だったのですぐ倒せました。」

日本の言うことが理解できてないのか全員の頭に?マークがうかんでいる。

ロシア「とりあえず殺したんだよね。だからそんな姿なんだ」

ロシアがイタリアと日本の血に染まった服を見て言った。

日本「すみません。すぐ着替えてきます。イタリア君も」

イタリア「あ、待って……!!」

日本とイタリアは着替えるために部屋を出た

アメリカ「そういえば連絡が取れない国があるらしいじゃないか。」

フランス「ああ、えーっと確か…………ギリシャ、トルコ、ウクライナ、プロイセン、韓国、ローマノ…………あとは忘れたw」

ドイツ「忘れるな！」

ロシア「姉さん…………無事だといいいけど…………」

中国「韓国もないあるか！？まああいつなら大丈夫あるな」

イタリア「着替えてきたよう！！」

イタリアと日本は着物？を着ていた。

日本「着替えがなかったもので…………自分の荷物に二着入っていたのでイタリア君に着せちゃいました」

中国「日本、その荷物にメイド服とかはまさか入ってるわけないあるよね？」

日本「……………」

日本はそっぽを向いた

全員「（持ってるのか……………」

イギリス「それじゃあ今の状況をまとめよう。何か情報を持ってる

奴はいるか？」

アメリカ「なんで君が仕切ってるんだい？」

フランス「そーだそーだー！！」

イギリス「だまれお前ら！」

日本が最初に挙手した

イギリス「よし、日本。言ってみろ」

日本「はい、先ほども言いましたが私とイタリア君が合流した直後、激しい光と風が襲いました。不審に思い、ドイツさんたちと合流しようとしてイタリア君と世界会議場に向かおうとしたんです。しかし突然、はつきり言って顔がヤバい謎の生物に襲われてしまいました。まあ弱かったですけど」

イタリア「あ！あとね！その後に謎の生物から変な黒い煙が出てきてね！日本に突進してきたの！間一髪で俺が倒したけど……」

アメリカ「君がかい！？めずらしいじゃないか！」

中国「おめえ白旗で倒したあるか？」

イタリア「うーん……なんか半分あって半分違うかな……」

ロシア「どういうこと？」

イタリア「白旗に刀が仕込んであったんだ！それで倒したよ！」

ドイツ「この前仕込んだいた刀が。役に立ってよかった」

イギリス「じゃあ謎の生物についてまとめよう」

イギリスは黒板に何かを書いていった

「謎の生物について」

・日本たちが戦ったのは弱かった

・弱点は普通の人間と同じ

・死ぬと、黒い煙で突進してくる

・顔がヤバい

ロシア「……………顔がヤバいのはいらないんじゃないかなあ……………」

中国「奴らに対しての最低の侮辱ある…」

フランス「美しくないものはお兄さん、嫌いなんだけどなあ……………」

アメリカ「それにしても黒い煙は一体何がしたいんだろう?」

イタリア「パスタ!」

ドイツ「んなわけないだろ」

フランス「。。。とか□□とか　　じゃない？」

イギリス「なわけねーだろ！もっとまともな意見を言え！」

中国「太極拳じゃないあるか？」

日本「ないと思います」

アメリカ「君達真面目に考えられないのかい！？ちなみに俺はヒーローになりたかったんだと思うんだ！」

ロシア「君も真面目に考えようよ。ヒーローになって何がしたいのかな？」

アメリカ「世界征服！」

イギリス「お前は図書館行って辞書でヒーローと世界征服って言葉を調べて来い！！メモって赤線ひけ！！」

そんなこんなで枢軸、連合の八人の言い争い？は2時間近く続いていたという。

***第三話 全員集合！*（後書き）**

次回の話が思い浮かばん；

感想お願いします！

***第四話　とりあえず本題に入ろうか*（前書き）**

久しぶりな更新なのに相変わらずの駄文；

*** 第四話 とりあえず本題に入ろうか***

世界会議場では疲れ果てた八人の姿があつた

言い争いを2時間もやっていたから疲れないほうがおかしい

日本「……………そろそろ本題に入りませんか？」

全員無言で頷いた

日本「問題はこの事件を解決するかです」

イギリス「なにか解決策があるやつは言え」

アメリカ「ハイ！でっかいヒー」「ほかにないかないか？」くたばれイギリス」

ロシア「はい」

イギリス「はいロシア」

ロシア「僕はこの事件には必ず黒幕がいると思うんだ。だから黒幕を倒せばこの事件は解決するんじゃないかな？」

フランス「つまりロシアは俺達がこの事件の黒幕を倒そうって言い
たいのか？」

ロシア「うん。僕たちみたいな国なら簡単に死なないし、この事件
は地球の危機、国の危機でしょ？自分の身は自分で守らないとね」

中国「我はロシアの意見に賛成ある」

ドイツ「俺もだ」

イタリア「俺も俺もー！！」

イギリス「じゃあロシアの意見に賛成する奴は拳手ー！！」

全員がそろって手を挙げた

日本「決まりですね」

イタリア「なんかおもしろそうになってきたよー！！」

アメリカ「日本のゲームのAED？みたいなんだぞ！」

日本「RPGです。人は救えません」

中国「ワクワクしてきたあるー！！」

日本「それではみなさんこの服に着替えてください」

日本はどこからか服を取り出してきた。

その服を差し出す日本は満足そうに微笑んでいた

ドイツ「……………日本、なんだこれは……………？」

日本「服です」

イギリス「それはわかるが……………なんで？」

日本「RPGの服といったらこういうコス……………戦闘服でしょう」

中国「今コスプレって言いかけたあるよね？」

フランス「いつもの軍服でよかったんじゃないか？」

日本「それじゃあ目新しさがないでしょう」

フランス「ダメだこりゃ」

ロシア「これは一人一人武器はあるの？」

日本「はい。イタリア君は弓矢。ドイツさんは鞭。私は刀。アメリカさんは二丁拳銃。イギリスさんは魔術。フランスさんは短剣。中国さんは双剣。ロシアさんは水道管です。武器は変えられるのでご安心ください」

イギリス「設定こたわってんな」

アメリカ「じゃあ出発しようじゃないか!!」

アメリカは先頭に立ち、扉を思いっきり開けた

これが八人の旅の始まりだった

*** 第四話 とりあえず本題に入ろうか* (後書き)**

八人の服と役職はヘタリアファンタジアとまったくおんなじです。

武器は自分で考えました

→ 思い出せなかったため

感想・意見があったらどうぞ言ってくださいませ！

見てくださりありがとうございました！

***第五話　まずやること*（前書き）**

約二ヶ月放置しててすみませんでした！

これからはなるべくがんばって更新するようにながりますのでよろしく願います

*** 第五話　まずやること***

アメリカ「……………全然敵がいなんだぞ!!」

イギリス「いないほうがいいんじゃないか？」

ドイツ「さっきまではうじゃうじゃいたのにな」

イタリア「ヴェ?うわああ!!なんか来たああああ!!」

―雑魚A、雑魚Bが現れた!!―

フランス「な、なんだこのアナウンス!？」

日本「RPGなので。それより敵のようです」

中国「雑魚って……………」

ロシア「とりあえず攻撃すればいいんだよね?えいつ」

―ロシアの攻撃!雑魚Aに200のダメージ!雑魚Aは屍となった
!―

イタリア「し…………屍…………?」

イギリス「とりあえず一匹倒したみたいだな。じゃあ俺が！」

―イギリスは妖精を呼び出した！………しかし何も起こらない―

フランス「意味ねーじゃんっ！！」

イギリス「うるせえっ！！」

―雑魚Bの攻撃！中国に50のダメージ！―

中国「あいやあああ！？でもあんま痛くねーある」

アメリカ「ホントに雑魚だな」

―アメリカの攻撃！！雑魚Bに150のダメージ！雑魚Bは屍となった！―

―戦闘終了。イタリア、ドイツ、日本、アメリカ、イギリス、フランス、中国、ロシアはレベルが上がった！！スキルが使えるようになった！150ヘタもらった！―

イタリア「なんかわかんないけどお金GET！」

日本「スキルを覚えたようですね。これで特殊な能力……魔法とかが使えるようになりますよ」

イタリア「特殊な能力？魔法？」

イギリス「俺はもともと使えるが？」

日本「イギリスさんは通常攻撃が魔法ですから…」

アメリカ「うーん、なんか早く使いたいんだぞ！ー！モンスター出てきてくれないかな！？」

イタリア「えーやだよー！怖いよー！」

アメリカ「モンスターカモオオオンツ！ー！」

中国「な、何叫んであるかお前！ー！」

アメリカ「え？だってスキル使いたいんだぞ！」

フランス「だからって呼ぶ奴がいるか！ー！」

ロシア「みんな、今は言い争ってる場合じゃないかも」

ドイツ「え？」

全員が周りを見るといつのまにかたくさんのモンスターに囲まれていた

イギリス「うわっ！？いつの間に………！？」

アメリカ「な、なんか大変なことになってるんだぞ！ー！」

中国「誰のせいだと思ってるあるか」

イタリア「ヴェエエツ！？怖いよおおっ！ー！」

ドイツ「落ち着けイタリア!!」

日本「仕方ありませんね。みなさん、戦う準備は出来てますか？」

一人除いて全員が頷き、戦う姿勢をとった

イタリア「やだやだやだやだ!!怖いもん!顔がヤバいもん!!」

ドイツ「いいからお前も戦え!!」

イタリア「ヴェ……………」

――モンスターの集団が現れた!戦闘を開始する――

またさっきのアナウンスが流れたと同時にモンスターは一気に八人に襲い掛かってきた

***第五話　まずやること*（後書き）**

書いてて、そういえば八人のHPとか考えてないなーと思ったので
今考えましたw

みんな最初はレベル1でした

イタリア

HP 450

ドイツ

HP 600

日本

HP 650

アメリカ

HP 550

イギリス

HP 600

フランス

HP 500

ロシア

HP 700

中国

HP 550

私的には日本とロシアはHPが多いっていうイメージがあります
イタリアとフランスはすぐ死にそうなので……

感想・意見がありましたらどんどんお願いします！

***第六話 戦闘* (前書き)**

技の名前とかとっっても雑です

* 第六話 戦闘 *

ガキイイインッ！！

ドオオオンッ！！

静かだった野原に様々な音が飛び交い、そして回りをどんどん赤くしていく

モンスターに囲まれた八人はどんどんモンスターを倒し、野原を血で真っ赤にさせていく

さっきと比べてモンスターはかなり減ったが、でも少なくなった訳ではない。

どんどん増えていくモンスター達に長時間戦ってきた八人もさすがに限界が近づいて来ていた

…………… 一人を除いて

イタリア「みんなああ！！がんばってええ！！」

ドイツ「イタリアアアアアア！！お前も戦ええっ！！」

イタリアは最初っから戦うことなどはせず仲間をずっと応援していたのだった

イタリア「え、だつて怖いし……」

日本「イタリアくん、戦わないから私達と比べてレベルの違いがすごいですよ」

イタリア「わ、ホントだ!!なんで!?!」

フランス「あたりまえだろ。戦わない奴のレベルが上がるんだつたら俺、戦わないよ?」

今のところイタリアはLv2

ほかの仲間は全員Lv10はいつている

イタリア「どうしょ……俺これ完全に足手まといじゃん!!」

イギリス「いつもだけどな」

中国「とりあえずオメエも戦うある!!きりがねーある!!」

イタリア「え、うん!-!」

イタリアはうたずいて、白旗を振りはじめた

ロシア「イタリアくん、モンスターに食べられたいのかな?」

イタリア「えええ!?!やだよおお!!-!」

ロシア「だったらちゃんと戦おうか？」

イタリア「ヴェ……………」

イタリアは渋々弓矢を取り出した

日本「しかし数がなかなか減りませんね……………。どうしよう………」

アメリカ「逃げるかい？」

イギリス「この数のモンスターの中から逃げるのは難しいだろう」

中国「でも我達の体力も限界ある。このままじゃモンスター達に食われるある」

イタリア「ヴェエツ！？やだあぁっ！！」

ドイツ「ところで日本、さっき覚えたスキルっていうのはどうやって使った？」

日本「あ、スキルのこと完全に忘れてました……………」

アメリカ「そういえばそんなの覚えたよーな……………」
フランス「忘れてたんかい……………」

日本「じゃ、まず私がやりますね」

日本はモンスターの前に立つ

モンスターは日本を睨む

日本は剣を抜き、前にだしこつ言った

日本「桜の乱舞！！」

その瞬間日本の周りに桜が舞い、辺りを包み込んだ

綺麗な桜は刃物のようにモンスターを次々に斬っていく

やがて桜が消えたときには生きているモンスターはどこにもいなくなつた

イギリス「す、すごい……………」

イタリア「ヴェ……………」

日本「まあこのようにスキルは敵に大ダメージを与えることができるのでとても便利なんですよ」

ドイツ「た、確かにすごいな……………」

日本は静かに笑い刀を鞘におさめる

日本「さあ行きましょうか」

八人は歩きだした

しばらく歩いた後に町が見えてきた

そう、そこがこの旅の本当の始まりの町

八人はこの町に來たことで様々な事件に巻き込まれていってしまっ
のだった……

***第七話 異世界の町* (前書き)**

かなりほっと思ってましたw

相変わらずgdgdです

町の名前とか考えました
クソ以下です

第七話 異世界の町

八人が門をくぐるとそこには素晴らしい世界が広がっていた

イタリア「わぁ……すごい……!!」

イタリアは目の前の世界に感動していた

ドイツ「ここはどこなんだ？」

日本「さっき拾った地図によりまして………確か『オリンティア』
という町のようなです」

イギリス「そんな町、この世界にあったか？」

ごもつともなご意見です、イギリスさん

日本「さっき気付いたのですがここは異世界のようです」

全員「え!!!?」

日本以外の全員が新たな真実にびっくりする

中国「そんなの初耳ある!!」

アメリカ「なんでわかったんだい!?!」

日本「最初に変だと感じたのはイタリアくんといった時です。光が消えた後、突然モンスターが現れました。その時には気付かなかったのですがモンスターを倒した後に改めて周りの景色を見たときに違和感を感じました」

フランス「違和感？」

日本「はい。いつも見ている風景が違つとなんか違和感を感じませんか？」

ロシア「あー、あるある」

日本「そんな感じです。気のせいかと思ったのですがその最初の違和感を感じた時からちよくちよく違和感を感じるようになってしましてさすがにこれはおかしいと思ったのです」

イギリス「だからここは異世界だと？」

日本「はい、こういうことがあるのは大体異世界って決まってるので」

中国「なんか信用できないある……」

8人が門の近くで立ち止まっていると慌てた様子で走ってきた子供がイタリアにぶつかってしまった

「キャア!!」

イタリア「わっ!だ、大丈夫!？」

子供は目に少し涙を溜めてイタリアの顔を見上げた

蒼い瞳に綺麗な金髪を青いリボンでポニーテールにし、ほかの人より白い肌のかわいらしい少女だった

「じ、ごめんなさい……」

イタリア「ううん！！大丈夫だよ！怪我不い？」

「大丈夫。お兄ちゃん達、旅の人？」

イタリア「あ、うん！そうだよ……」

アメリカ「違うんだぞ！！俺達はヒーローさっ」

イタリアの言葉はアメリカの言葉で完全に遮られた

「そ、そーなんだ……」

女の子は少し引き気味だ

ドイツ「ま、待て！断じて違うからな！！」

イギリス「ああ！俺達は普通の旅人だ！！」

イギリスとドイツがアメリカをおさえて笑顔で女の子に言った

「そうだよね！ヒーローなんて非現実的なもの、いたらおかしいもんね！」

アメリカ「なんだとー！！君にヒーローの何がわかるってんだ……」
イギリス「黙れ」

笑顔の女の子につつかかろうとするアメリカをイギリスはおさえた

「私、イリユーシャ！お兄ちゃん達は？」

イタリア「えつと俺は………」

アメリカ「俺はアメリカだ！！んで、左から中国、ロシア、イギリス、ドイツ、俺、フランス、イタリア、日本なんだぞ！」

イタリア「アメリカ、俺の言葉遮るのそんなに楽しい？」

アメリカのボケっぷりに、イタリアまでがツツコミになってしまう。

「えと………イタ………ドイ………にほ………？」

フランス「一気に言われたから覚えられないよな。いいよ、今はあだ名とかつけて呼んでも」

フランスがイリユーシャの頭を優しく撫でる

「うん！ありがと！変態おじちゃん！！」

フランス「うん、そのあだ名はやめよっか」

中国「一目で変態だってわかってしまっくらいフランスが変態だったなんて知らなかったある……！」

フランス「誤解だよ！」

ロシア「本当のことだけどねー」

「変態おじちゃんじゃ嫌だった？んー……じゃあHなおじちゃん？」

フランス「さっきとあんま変わってないよ！てかなんでおじちゃんからおじいちゃんに！？そんなに老けて見える！？」

「ここにいるみんなの中で1番」

フランス、心が折れる

日本「結構ずばずばと言いますね、イリユーシャさん」

イタリア「年下なのになんか怖くなってきた……」

「それよりお兄ちゃん達、私の家に来ない？」

イギリス「え、いいのか？」

「うん！だつてお兄ちゃん達、お腹空いてるでしょ？」

グウウウ………

イリユーシャが言った直後にアメリカのお腹がなる

イギリス「でけえ音……」

アメリカ「お腹空いたんだぞ……」

日本「でも確かにお腹は空きました……」

「やっぱり！」

イリユーシャはクスクス笑う

「さ、行こ！私の家、近くなんだ！！」

イリユーシャはイタリアの腕を引っ張り走り出した

イタリア「わわ！待って！もうちょっとゆっくり……！！！」

日本「ふふ、微笑ましいですね」

イタリアとイリユーシャの後を日本達は追った

***第七話 異世界の町*（後書き）**

感想お願いします!!

*** 第八話 光の都* (前書き)**

イリユーシャ、前の話ではどこにでもいる子供みたいな口調だった
はずなのに……

イタリア達に対してめちゃくちゃタメ口になつとる……………

* 第八話 光の都 *

「ただいま!!」

イタリアの手を引きながら扉を元気よく開けた

しかし少し古びた家には誰もいなくて静かだった

イタリア「あれ……?」

イタリアは少し驚いたが、イリユーシャはさつきと変わらない笑顔だ。

「お兄ちゃん達はここに座ってて!私、料理作って来るね!」

イリユーシャは部屋を走って出ていった

日本「……誰も……いないのでしょうか?」

イギリス「出かけてるんじゃないか?」

ロシア「それは違うかなあ?」

イギリスの考えをロシアが否定する

イギリス「え?」

ロシア「部屋をよく見て。イリユーシャちゃんのほかにお母さんと

かお父さんが住んでいたら部屋はこんなガラツとしてないよね？」

ロシアの言うとおり部屋にはテーブルや椅子などしか置いておらず、少し寂しげな部屋だった

フランス「でもあの歳で一人暮らしって……」

中国「今の時代、そんな子供がいてもおかしくないある」

「おまたせー」

8人が話しているとイリユーシャが料理を手に持ち入ってきた

テーブルまで歩いていき、持っていた料理をテーブルの上に置く

料理は小さい女の子が作ってきたとは思えないくらい見事なものだった

イギリス「これ、お前が作ったのか!？」

「うん!慣れてるから!」

ドイツ「慣れて……?」

「さ、食べて食べて!」

イリユーシャに進められて8人は料理を口にした

日本「こ………これは……!」

中国「うまいある！イリユーシャすごいある！」

「えへへ」

ロシア「うん、おいしい」

アメリカ「うまもぐもぐイリユもぐもぐ」

イギリス「食いながら喋んな！」

「喜んでくれて嬉しい！たくさんあるからいっぱい食べてね！」

イリユーシャも椅子に座り料理を頬張る

アメリカ「イリユーシャ、お母さんとお父さんは出かけているのかい？」

こんのAKY！！と全員が思っただろう

アメリカは自分がやったことに何も悪意を感じてないらしい

イギリス「おいアメリカ！お前なんてことを……！！《小声》」

アメリカ「え？俺なんかいけないことしたかい？」

イギリスはイリユーシャを見た

しかしイリユーシャは涼しい顔で

「ううん。お母さんとお父さん、最初っからいないよ？」

イタリア「え……」

「小さい時に二人とも流行り病で死んじゃったの」

中国「流行り病？」

「うん。ずっと前にね、この町に治療法がない謎の病が流行ってたの。治療法がないからその病にかかったら最期、たくさんの人が亡くなったわ」

ドイツ「たくさんの人が……」

「お母さんとお父さんもその犠牲者の中にも入ってる。病にかかってからわずか一週間で私を残して死んじゃった」

イリユーシャは悲しむ様子もなく、無表情で話す

イタリア「悲しくなかったの？」

「そりゃあ悲しかった。最初は全然立ち直れなかったもん。でもね、しばらくしたら泣いても仕方ないって思いはじめた。だからお父さんとお母さんの分まで笑って生きよう、って」

中国「うう……泣ける話ある……」

中国のほかにも何人が鼻をすすっていた

日本「しかしこの美しい町にそんなことが……」

「うん。町に災いが起きるときつてね、町の宝『光の宝具』が関係してるんだって」

ロシア「『光の宝具』？」

「この町は光の都とも呼ばれてね、この世界の八大都市の一つなんだ」

イタリア「八大都市？何それー？」

「文字通り八つの大きい都市のことだよー」
中国「まんまあるな」

「八大都市にはそれぞれの町に一つずつ宝具が封印されてるんだよ」
ロシア「宝具ってどんなの？」

「うーん……武器……かな……？」

アメリカ「武器？」

「うん。宝具だから強力な力を持ってるんだってー！！」

フランス「敵に狙われやすいのか？」

「変態おじさんの言う通り。強い力を持つ宝具は様々な盗賊とかに狙われてて、よく町に災いが起きるよ」

フランス「だから変態おじさんはやめてえっ！！」

フランスが涙目になる

ドイツ「でも宝具は封印しているんだろ？盗賊たちはどうやって宝具を奪うんだ？」

「宝具はこの町の隅っこにあるすごい大きい遺跡の中にあってね、遺跡の最上階に宝具が封印されてるから盗賊たちは最上階まで行けば手に入るってわけ」

イタリア「そんな簡単に！？」

「簡単なんかじゃないよ。遺跡は迷路状態で最上階まで行くのにすごく苦勞するし、宝具は古代の強力な魔法で封印されてるから選ばれた人しか封印は解けないんだよ」

日本「選ばれた人？」

「うん、宝具は人を選ぶの」

イタリア「ヴェー！？い、生きてるの！？」

「いやいや、生きてるわけじゃないんだけどね。その宝具の性質、っていうのかな？宝具は自分にふさわしい人を選ぶの」

中国「すごいある！！絶対その宝具を手にいれてやるある！」

日本「ダメですよ中国さん！」

中国「金ある、世の中金ある！！」

中国はもう金のことしか考えていない

「あーむやみにそういう考えで行かないほうがいいよ、中国兄ちゃん」

中国「なんであるか!？」

「死ぬよ?」

イリユーシャの言葉に全員言葉を失う

イタリア「ヴェー!! そんなきつぱり言わないでー!!」

「あ、ゴメン。でもずっと前にねある盗賊が最上階について宝具の封印を解こうとしたら、宝具を守る古代の強力な魔法が盗賊をみんな殺しちゃたんだ」

フランス「おい……マジかよ……」

ロシア「じゃあ金目当てで行ったら死んじゃうからやめとこうね、中国くん?」

中国「でも……!!」

ロシア「そんなに死にたいなら僕はとめないけどねー」

中国「別にお前の許可なんて求めてねーある!!」

ロシアと中国は言い争いを始めてしまった

「ねーねードイツ兄ちゃん」

ドイツ「なんだ？」

「もしかして……お兄ちゃん達って……仲、悪い？」

イリユーシャは半信半疑で聞いた

ドイツ「……もしかしなくても仲が悪いんだ」

ドイツはすごく困ったように答えた

「仲悪いのに一緒に旅してるの！？大変じゃない？」

ドイツ「ああ、いろいろあってな。すごく大変だ、特に俺は1番疲れやすいようだ」

イタリア「ヴェー、ドイツ疲れてるの？どーして？」

ドイツ「ほとんどお前のせいだな」

イタリア「そーなのー？疲れやすいのはトマト食べてないからだよー！隊長はトマトが足りないでありますー！！」

ドイツ「トマト食べたって変わらないだろー！」

イタリア「ヴェー」

「ドイツ兄ちゃんの疲れの原因、大体わかったよ………」

イリユーシャが呆れ顔で言った

ワーワー……

アメリカ「ん？なんだか外が騒がしいんだぞ！」

「またか……………」

イギリス「な、なにがだ？」

「お兄ちゃん達、絶対に外に出ちゃダメだよ」

イタリア「ヴェ？なんでー？」

「こっち来て」

イリユーシャが窓側に八人を呼んだ

八人は窓側に行き、窓の外を見て愕然とした

外では争いが起きていた

この町の住人と思われる人達がたぶん他国の出身だと思われる男達に殴る、蹴るなどの暴力をつけていた

日本「何が……………」

「最近、他国から来た盗賊がこの町に来た」

中国「盗賊！？ということとは……………」

「あいつらも『光の宝具』が目的だよ」

イリユーシャは外にいる盗賊を見ながら言った

怒っている様子もなくただ無表情で見ている

ロシア「じゃあ近々災いが……………」

「もう起きてるよ」

イリユーシャは窓から離れた

「最近、昔みたいに病気が流行ってきたんだ。まだ死者はないけど治療法がないからどうにかしないと死者はいずれ出てくるかも」

アメリカ「どうすればいいんだい!？」

「そんなの決まってる。あいつらを倒して『光の宝具』を守るの!」

イリユーシャが大きい声で叫んだ

静かに話していたイリユーシャが突然叫んだので、全員驚く

イギリス「倒すって……………殺すのか?」

「うん。殺さなきゃ『光の宝具』は守れない。だから!」

ドイツ「落ち着け!」

興奮状態のイリユーシャをドイツがとめる

「ゴメン……。でもなんとかしないと私達の街、オリンティアが前みたいに大変なことになっちゃう……」

イギリス「イリユーシャ……」

「でも私なんかでどうにもできない……」

イリユーシャが悔しい顔で下を向いた

全員何も言えずに立っていたがイタリアが歩き出してイリユーシャの頭に手を置いた

イタリア「俺達が何とかするよー!」

ドイツ「イタリア!」

イリユーシャが顔を上げてイタリアを見る

「……………ホントに?」

イタリア「うんっ!ドイツ達がなんとかしてくれるよー」

イギリス「お前は何もしねーのかよ……………」

イタリア「えっ？だって俺戦いとか向いてないし怖いし痛いのだし……」

中国「やっぱお前はヘタレあるな……」

フランス「イタリアらしいけどな……」

「ありがとう！」

イリユーシャがとびっきりの笑顔でお礼を言った

日本「まあ何かモンスターに関して何かわかるかもしれませんが……」

イタリア「よし出発だあ！！」

イタリアが片腕を突き上げて叫んだ

イタリア「………で、どうすればいいの？」

全員「………」

イタリアの言葉に全員が絶句した

*** 第八話 光の都* (後書き)**

イリユーシャは七歳くらいです

なのにあんなにしつかりしててどーすんだ………

*** 第九話 調査* (前書き)**

更新いつも遅くなってしまい申し訳ございません……

これからはなるべくがんばります……………って何回言ったんだろう
か……

* 第九話 調査 *

イタリア達はイリユーシャの家から出てとりあえず街をぶらぶら歩いていた

しばらく歩いていると商店街のような通りに出た

イタリア「うわぁ！！なんかすごいよドイツ！」

ドイツ「確かにすごいな……」

「ここはオリンティアでも有名な所だから毎日大勢の人が来るんだよ！」

イリユーシャの言うとおり通りは大勢の人であふれていた

イタリア「わ！あれおいしそう！！あれも！」

ドイツ「おい遊びに来たんじゃないんだぞ」

ドイツが注意をしたときにはイタリアはすでにその場にいなかった

フランス「早っ！」

アメリカ「一瞬でいなくなっただぞ……」

ドイツ「……………イタリアアアアアアア！！！」

イタリア「ヴェッ！？なんか今ドイツの怒鳴り声が……………」

イタリアはお店の人から頼んだアップルパイを受け取りながらビクツと体を震わせた

イタリア「き、気のせいだよね……………」？」

お金を払いアップルパイを食べながらイタリアは歩きはじめた

イタリア「平和だな……………」

雲一つない青空を眺めながらイタリアはつぶやく

イタリア「あ！そういえばドイツ達に黙って勝手にいなくなっちゃったんだった！怒られるかな……………は、早く帰らなきゃー！」

イタリアはさっきいたところに戻るために道を走った

走っているイタリアの前を黒いマントで顔がよく見えない男が歩いていて

イタリアはそのままその男の隣を走っていかうとしたが、すれ違い様に男は口を開いてイタリアだけに聞こえる声で言った

「お前らはもうすぐで死ぬだろう。私達の手によってな……………」

イタリア「ヴェー!!?」

イタリアはびっくりして足をとめて後ろを振り返った。
しかし男はもうすでにいなくなっていた

イタリア「え、な、うわああああ!？」

日本「!!今イタリアくんの声がしませんでしたか？」

ドイツ「ああ、確かに聞こえたな……………」

「あっちの方からだったね」

イリユーシャが南の方向を指さす

フランス「行ってみるか」

八人はひとごみの中を走っていった

ドイツ「イタリア！！おい、どこだイタリア！！」

ドイツ達はひとごみを掻き分け前に進んでく
そして道でうずくまっている茶髪の青年を見つけるとドイツ達はす
ぐその青年にかけよった

ドイツ「おい！イタリア大丈夫か！？」

ドイツはイタリアの肩をゆすった
イタリアは顔をあげてドイツの顔を見た瞬間、目から大量に涙を流
しながらドイツに飛びついた

イタリア「うわあああん！！ドイツー！！怖かったよおお！！」

大号泣するイタリア。

それを通り過ぎていく人達はじろじろと冷たい視線で見る

「は、恥ずかしい……………」

イリユーシヤは手で顔をおった

ドイツ「何があつたんだ？」

イタリア「え、えと……………あれ？」

フランス「おいおい、まさか何があつたのか忘れたわけないよな？」

フランスが首をかしげているイタリアに半信半疑で聞いた

イタリア「……えと……忘れちゃった……はは」

イタリアが笑ってごまかした

イギリス「笑い事じゃねえだろ!!」

しかしそんなイタリアをイギリスが怒鳴る

イタリア「ヴェ!?!」

イギリス「泣くくらい怖かったんだから普通忘れねえだろ!! バカか、お前はバカか!!」

イタリア「ごめんなさいごめんなさい!! なんでもするからぶたないでえっ!!」

日本「お、落ち着いてください!」

「ほかの人がじろじろ見てるよお……恥ずかしいよお……」

イリユーシャはもう顔が真っ赤だ

ドイツ「い、一回人通りが少ないところに行くぞ」

9人は路地裏に移動した

イタリア「う、う、イギリス怖いよー……」

イギリス「あゝ！？」

イタリア「ひいつー！！」

フランス「落ち着けよ元ヤン」

イギリス「誰が元ヤンだ！！」

イギリスはかなり機嫌が悪い
イタリアも半泣きだ

「イタリア兄ちゃん大丈夫？」

イタリア「全然……」

「え」

中国「お前小さい女の子にそんなヘタレな所見せて恥ずかしくない
あるか……」

中国が呆れ顔で言う

イギリス「つたく……もうちょっと強くなれ、守られてはっかで
どうすんだよ……」

イタリア「だつて……」

「あー、イギリス兄ちゃんまたイタリア兄ちゃん泣かした……」

イリユーシャが冷たい目でイギリスを見る

イギリス「なんだよその目は！！」

「いや別にー。あ、そうだ用事思い出した。私ちよつと家に戻るからお兄ちゃん達は調査を続けてねー！！」

イリユーシャは手を振りながら走って行きイタリア達の視界から消えた

ドイツ「イタリア、落ち着いたか？」

イタリア「あ、うん。大丈夫ー」

ロシア「それじゃ調査に行こうか？」

中国「盗賊と遺跡のことについて聞けばいいあるな」

中国が路地裏から出て街の人に聞きはじめた

イタリア達は中国の後を追いついて中国と街の人の会話を聞いた

中国「最近、ここらへんで盗賊が乱暴してるってことは知ってるあるか？」

中国は髭を生やした中年の男に話し掛けた

「あ、ああ。俺が住んでる家の近くにも来た。俺は家の中にいたから大丈夫だったんだが妻は外に出ててな、大怪我しちゃった」

ロシア「盗賊は住人に暴力をふるうだけなの？」

「いや、俺が聞いた話によると一昨日盗賊に殺された人もいるらし

い」

アメリカ「殺されただって!？」

「ああ、いきなり剣できりつけられたそうだ。即死だよ」

フランス「じゃあ盗賊は平気で人を殺すってことだな。そんな簡単じゃないらしいな、盗賊倒すの」

日本「そのようですね」

「お前達、旅のもんか。盗賊をなんとかしてくれんのか？」

イギリス「ああ、イリユーシャに頼まれたからな」

「イリユーシャ？ああ、さっきまでいた金髪の子か」

ロシア「知り合いじゃないの？」

中国「同じ街に住んでるのにあるか？」

「ああ、なんたってここは大都市。広い街だから知らない奴もいるなあ」

イタリア「へー……でもイリユーシャちゃんかわいいよねー」

「え、あ、ああ」

ドイツ「イタリア！いきなりそんなこと聞いてるんじゃない!」

イタリア「わあ！？」「ごめん……」

日本「お忙しい所ありがとうございます」

「いやいや！盗賊のことよろしくな」

男性は笑いながら人混みの中に消えていった

中国「って遺跡のことはまだ聞いてないある！！」

日本「あ……」

中国「何送り出してるあるか！おいっ！待つあるじじい！」

フランス「じじいとか言っちゃダメだろ！」

イギリス「というかお前もじじいだろ……」

アメリカ「まあまた人に聞けばいいんだぞ！」

ドイツ「そうだな、よし調査を続けよう」

8人はまた歩き出した

***第十話 少女の決意*（前書き）**

最近この小説を書くのをがんばっています。

まあ誰も見てないし楽しみにしてる人なんかいないでしょうが………

* 第十話 少女の決意 *

調査を続ける8人はとりあえず歩いていた少年に声をかけた

日本「すみません、ちょっとよろしいですか？」

「え、あ、はい」

少年は振り返る

日本「あの、この街にある遺跡のことなんですが……」

「遺跡??」

ロシア「うん、この街にある光の宝具が封印されてるっていう……」

「えーと……すみません、僕知りません」

少年は申し訳なさそうに謝った

日本「そうですか……ありがとうございます」

8人は少年から離れた

ドイツ「おかしいな……」

イギリス「確かに……、今まで聞いてきた10人全員遺跡のことを知らないなんてな……」

フランス「しかも光の宝具のこと知らないなんて……………」

中国「でも誰かしら知ってるかもしれないある、続けるある」

イタリア「ねえねえそのベツラ！ちょっと聞きたいことが……………」

ドイツ「イタリアは女にしか聞いてないな……………」

アメリカ「イタリアらしいんだぞ……………」

イタリアはしばらく楽しそうに女性と話をし、ドイツ達の所へ帰ってきた

日本「どうでしたか？」

イタリア「えとねー！あの人、紅茶と猫が好きで……………」

イギリス「殴られたいのか？」

イタリア「ご、ごめん！嘘！…！」

拳を固めたイギリスを見てイタリアは必死に謝る

イタリア「あの子も知らなかったよ、遺跡のことと宝具のこと」

ドイツ「そうか……………」

イタリア「どうするの？」

日本「……………あ」

アメリカ「どうしたんだい？」

日本「たぶん盗賊は遺跡の場所を知っているはずですが、だから盗賊についていつて遺跡にたどりつきなんだかんだで盗賊を倒し光の宝具を守ると言うのはどうでしょう？」

フランス「お、なるほど。頭いいな」

イギリス「よしそれで行こう」

「何が？」

全員「わあああっ!？」

突然後ろから声がし、驚いて全員叫び声をあげる

「う、うるさ……………」

イギリス「イリユーシャ!？」

後ろにいたのはさつきいなくなったイリユーシャだった

ロシア「用事はすんだの？」

「うん!ついでに遺跡のことについても調べてきた!」

イリユーシャは得意げに8人に遺跡のことについて話しはじめた

「遺跡の名前はルティア遺跡。古代からある神に守られし遺跡。神様に守られてるから遺跡にはたくさんの仕掛けがしてあるんだって」

イタリア「し、仕掛け？」

「うん、ほら遺跡は仕掛けのせいで迷うらしいし。あと遺跡に光の宝具があるのは仕掛けがたくさんあって安全だから昔の人がルティア遺跡に宝具を封印したんだって」

中国「なるほど……じゃあ盗賊はおるか我達も遺跡の仕掛けに引っかかるんじゃないあるか？」

「その通り！！」

中国「嬉しそうに言われても困るある……」

ドイツ「しかしとても参考になる情報だ、ありがとう」

「ううん、大丈夫だよ！お兄ちゃん達遺跡に行くの？」

ロシア「そーだねー。まとめて殺った方が手間が省けるし」

水道管片手にロシアはいつもみたいに笑顔で言う

フランス「イリューシャは家で待っててな」

フランスはイリューシャの頭を撫でた

しかしイリューシャはその手をはらいのけた

「私も行く」

イギリス「は！？危ないだろ！ダメだ！」

「やだ、行くったら行く！」

イリユーシャはイギリスの言うことを聞かず、答えを変えない

イタリア「あ、じゃあ俺がかわりに残……………」

ドイツ「お前は行くんだ！」

イタリア「えええ！？」

日本「イリユーシャさん、なんでそんなに行きたいんですか？」

「許せないの、自分達の勝手に他人を巻き込む奴らが」

イリユーシャは綺麗な蒼の瞳に涙をにじませている

イタリア『イリユーシャちゃん……………お母さんとお父さんのこと…

……………』

イタリアはイリユーシャを見つめた。かすかにイリユーシャの足が震えているのに気づきイタリアは口を開いた

イタリア「俺からもお願い。イリユーシャちゃんも連れていこう？」

中国「な、お前……………」

フランス「いいのか！？イリユーシャはまだ小さいんだぞ！？何か

あつたら……」

イタリア「イリユーシャちゃんだって本当は怖いかもしれない、でもそれを我慢して行ってくて言ってるんだよ？俺には絶対無理だよー……。それなのに置いてくなんてことは俺、したくない」

ドイツ「イタリア……」

「イタリア兄ちゃん……」

日本「……私からもお願いします」

しばらく黙って聞いていた日本もイリユーシャの隣に歩いていき頭をさげた

ロシア「どうするの？みんな」

ロシアもイリユーシャの所に移動して質問した

ドイツ「わかった、連れていこう」

「ほんっ……！！」

ドイツ「ただしー！」

今にも飛び回って喜びそうなイリユーシャをドイツは止めた

「絶対危険なことはするな、わかったな？」

ドイツはそう言って照れ臭そうに笑った

イリユーシャは飛びきりの笑顔で

「了解であります！隊長！！」

元気よく敬礼した

***第十話 少女の決意*（後書き）**

私が書く小説のイタリアはなんか違う気が……

でも浪川さんボイスで真面目なイタリアの言葉を言ってもらいたい
と思うのは私だけでしょうか……

あ、できれば感想をお願いします！

* 第十一話 買い物 *

イタリア「ヴェー、ドイツー、遺跡行かないのー？」

9人はまだ人混みの中を歩いていた

ドイツ「お前はその装備と状態で行くつもりか？」

イタリア「ヴェ……………」

イタリアの今の装備は普通の戦闘服に中古の弓矢。

そしてLv2でさっきの戦闘の時になんもしてないくせに白旗を降りまくったため体力を消耗し、HPが現在残り10。

つまりスラムに一回攻撃されたくらいで即死んでしまうような最悪な状況である

イタリア「あら……俺、完全にダメな奴じゃん……」

イギリス「だからいつもそうだろ」

日本「さすがに今の私達の装備では遺跡までは行くのは困難ですね、丈夫な武器などを買きましょう」

フランス「さっきモンスターの成群と戦ったときに金がかっぱがっぱ手に入ったしねー」

「やらしっ……」

フランス「イリユーシャ俺にだけ扱いひどくない!？」

中国「お前はそういうポジションがお似合いある。」

イギリス「そーだそーだ!文句いうなー!！」

フランス「みんなして俺をいじめないでー!!お兄さん泣くよ!？」

中・イ「泣けよ、勝手に」

フランス「(泣)」

ロシア「本当に泣いた……」

ドイツ「おい、早く行くぞ」

イタリア「フランス兄ちゃん泣かないでー」

イタリアがフランスの頭を撫でて慰めた。

フランス「うう……イタリアありがとう……お前は本当に優しい子だなあ……」

イギリス「じじいか、孫好きの」

九人は武器・防具屋に行く

「お、いらっしゃーい」

お店のおじさんが九人に気付き挨拶をした

ドイツ「すまないが武器などを見せてくれないか？」

「おお、好きなだけ見てつてくれ！」

九人は店の中を歩き回り売り物を見る

イタリア「ドイツー！武器なんでもいいのー？」

ドイツ「ああ、自分に合った武器を買えばいい」

イタリア「じゃあこの『丈夫な白旗』を……」

ドイツ「それはダメだ」

ヴェ……………、と悲しそうな声を出してイタリアは渋々白旗は諦めた

ロシア「ねーねー僕さ、水道管じゃなくてもいいよね？」

中国「別にいいんじゃないか？第一、水道管で戦うことがどうかと思うある」

ロシア「じゃあこれとか？」

ロシアが手に持っているのは大きな鎌だった

中国「こゝ、恐すぎるある！！でも似合いすぎてある……………」

ロシア「ん？何？」

中国「なんでもないある！！いいと思うあるよ！！」

ロシア「そっかぁ、じゃあこれにするよ」

ロシアは鎌に決めたようだ。

中国は顔を青くしてそっぽを向く

イギリス「イリユーシャも念のためなんか武器買っとけ。ナイフとか……」

「うん！わかった！」

アメリカ「イギリスは武器買わないのかい？」

イギリス「俺は魔術だからな。でもまあ魔術書とかは買っとくか」

しばらくして全員は買い物を済ませ店を出た

それぞれ前より強力な武器を買い、ロシアは新たな武器として鎌を
買いイリユーシャはナイフを買った

ほかにも回復アイテムやらなんやらいろいろ買って全員の体力もも
とに戻り行く準備は万端だ。

ドイツ「さて行くか。イリユーシャ、遺跡はどこだかわかるか？」

「うん、街の奥の方にあるよ。案内するね」

イタリア「遠いの？」

「たぶん丸一日はかかるかなあ？」

イタリア「え！？つ、疲れるよ……………」

日本「途中で宿に泊まるので大丈夫ですよ。今は昼ですしできるだけ進みましょう」

イタリア「パスタは食べられるよね？」

イギリス「水をなくす気が！！しばらくは我慢だ」

イタリア「え！！！？やだああ！！！」

フランス「仕方ないさ。水がなくなったらダメだろ？あとでいっぱい食べればいいさ」

フランスはイタリアをなだめる

イタリアは涙を流しながらも頷いた

ドイツ「よし、じゃあ行こう」

9人は歩き出した

「絶対お前らを殺してやる……………」

イタリア「？」

どこから声が聞こえたがイタリアはさほど気にせずにそのことはすっかり忘れてしまった

***第十一話 買い物*（後書き）**

ということでロシア武器変更

なんかロシアって大鎌使ってそうじゃね？つか使ってたらかっこよくね？という作者の馬鹿の頭が考え出した案によりロシアは鎌を使うことになりました。

まあ鎌を使いながらも水道管もちよくちよく使う、ってことで

***第十二話 無人の住宅街* (前書き)**

や、やっと投稿できた……………

放置していてすいません……………

間違いとか結構あると思います。
あと駄文です。

第十二話 無人の住宅街

街を歩いていくとあまり人がいなくなっていた。

さっきまであんなに大勢の人がいたところにいたからこんなに静かだと少し怖い。

フランス「静かな所だね……………ここに人は住んでないの？」

フランスがイリユーシャに聞く

「昔は人住んでたらしいけど……………昔流行った病気で全員死んじゃったんだって」

フランス「怖いなあ…………『光の宝具』の力ってのは」

ドイツ「少し探索してみよう、何かわかるかもしれない」

九人はイタリア・日本、ドイツ・ロシア、アメリカ・フランス、イギリス・中国・イリユーシャにわかれて探索を始めた

（ドイツ・ロシアチーム）

ドイツ「どうやらホントに人いないみたいだな」

ロシア「いなくはないよ？」

ロシアが古びた家の扉を開けて中をみつめながら言う

ドイツも中を見てみた

ドイツ「こゝれは……………」

家の中にあるのはもう白骨化した死体だった。

ロシア「ここに住んでた人達は死んでからもずっと放置されてるみたいだね」

ロシアは中に入り死体の上に布をかける

ドイツ「あとでちゃんとした所に埋めてやろう」

ロシア「そうだね」

二人は布をかけた死体に合掌した

イギリス・中国・イリユーシャチーム

そのころイギリス達も民家に入り白骨化した死体を見つけていた

「きゃあああああ！?!？」

イリユーシャは驚き中国の後ろに隠れる。小さい女だから無理はない

イギリス「だいぶほこりかぶってんな……………」

中国「てことは長年放置されてた、ってことあるな」

「し、死んでるの？」

イリユーシャが恐る恐る聞く

中国「当たり前ある。よく見るよろし、もう骨になってしまってるある」

中国が頭蓋骨を優しく持ってイリユーシャの目の前に持ってくる

中国「ほら」

「ぎゃあああ！?!やだやだ怖い！近づけないで!?!」

イリユーシャは頭蓋骨を叩いて全力で拒否する

イギリス「おい二人とも！人の頭で遊ぶな!」

イギリスが中国の手から頭蓋骨を取り上げる

イギリス「……………つたく、……………ん？」

イギリスは視界のすみで何かが光ったのに気付いた。
それに嫌な予感がしたイギリスは勝手に体が動いていた

イギリス「二人とも、ふせろっ！！」

中国「は？」

「え？」

戸惑って動かない二人をイギリスは手に持っていた頭蓋骨を放り投
げて二人の頭をおさえて三人でふせた

ふせた途端に頭上で風を切る音がしたのをイギリスと中国は気付いた
イリユーシャはわけもわからずふせている

「な、何？」

イリユーシャが体を起こしながら二人に聞いた。

イギリス「あれ、見ろ」

イリユーシャはイギリスの目線の先を見た。

目線の先には家の壁に深々と突き刺さった矢があった

中国は矢をぬいてイギリスとイリユーシャの所に持ってくる

中国「猛毒が矢に塗られてるある。かすったりしてても1時間くら
いでぼっくり死んでたあるな」

「ぼっくりって……………」

イギリス「こいつらが家に仕掛けをしていたのか……………?」

イギリスが死体を見て呟く

中国「なんのために……………」

「ねえ、もうここヤダ。怖いし死にかけるし……………早く出よ……………
…つとわあっ!…!」

入口に歩いていったイリユーシャは途中で盛大に転んだ

中国「イリユーシャ!?!?だ、大丈夫あるか!?!」

「いたた……………床に何かが……………」

イリユーシャは頭をおさえて床を見る

床に落ちていたのはさつきイギリスが放り出した頭蓋骨。

「……………つ!…!」

イリユーシャは声にならない叫びをあげて中国にしがみついた

イギリス「あ、それさつき投げちゃったんだよな……………」

「ざけんな眉毛ぶつ殺すぞ!…!」

中国「落ち着くある!…!」

イリユーシャは泣きながら大激怒している

イギリス「わ、悪い……………」

「謝ればすむと思ってんじゃねえ!！」

中国「イリユーシャ!！キャラ!！キャラ崩壊しまくってるある!！」

「知るかああああ!！」

このチームはいろんな意味で苦勞していた。

くアメリカ・フランスチームく

フランス「ゲホツ……………ほこりっぱいな……………」

フランスが民家に入ってあまりのほこりっぱさに咳をした

アメリカ「菌をまきちらさないでくれよ!！」

アメリカがその後ろで不安そうに声をあげる

フランス「き、菌って……………俺がどんな菌を出すっていうんだ！」

アメリカ「変態菌という恐ろしい菌なんだぞ」

フランス「ひどっ！！アメリカいつからそんな性格になったんだよ！」

フランスは泣きそうになるが我慢する

フランス「やっぱり誰もいないみたいだな……………一応全部の部屋を確認しとくか。アメリカはあっちの部屋見て……………」

アメリカ「うっわこの魚腐ってるんだぞ、でも納豆だって豆が腐ってるのにおいしいし……………もしかしたらこの魚もおいしいんじゃない」

ゴツッ！！

家に鈍い音が響いた。

フランス「ふざけてないでさっさと行け」

アメリカ「……………ふぁーい」

アメリカの頭にはさっきフランスに殴られてきたたんこぶができていた

アメリカは小さく返事をするとは違う部屋を見に行った

フランス「ったく……………」

フランスも違う部屋を探索し始める

ある部屋の扉を開けたとき異臭がフランスを包み込んだ

フランス「うっ……………なんだこの匂い……………」

フランスは口と鼻を手でおさえて部屋に入った

部屋の真ん中にはボロボロになったベッドが置いてあった
掛け布団が膨らんでいる

フランス「なんだ……………？」

フランスはおそろおそろベッドに近づき掛け布団をめくった

そこにいたのはもう腐っていて所々が白骨化している死体だった

フランス「うっ……………」

フランスは少し吐き気がしたがこらえる

フランス「臭さの正体はこれか……………っ」

フランスは顔を歪め部屋から出ようとした

アメリカ「フッランスー！！こっちは別に何もなかったんだぞー！
」

しかしアメリカがドアを破壊しフランスに体当たりをしてきたため
それはできなかった

フランス「ちょ、アメリカ！！空気読んで！てか匂いかいで！状況
理解して！」

アメリカ「あー、悪いんだけど俺、今鼻がつまってて匂いは嗅げな
いんだぞ」

フランス「運いいなお前！！」

フランスはそこでハツと思い出す。

アメリカは確かお化けとか怖いものの類が大の苦手だ。

さっきの死体はフランスから見ても普通に怖いしグロい

つまり

死体を見た瞬間怖すぎてアメリカ大暴走
っていうことがありえるかもしれない

そんなことになったらマジでめんどくさい。

フランス「お、おいアメリカ。こっちにも何もなかったから別の所
に行こう？な？」

そう言うとアメリカは不満そうに

アメリカ「えー？だってこの部屋めちゃくちゃ怪しいんだぞ」

変なところするどいアメリカである。

アメリカ「怪しい所を捜査するのはヒーローの仕事なんだぞ！！」

いや違うだろ、とフランスは思うが口には出さない

フランス「怪しいけど何もなかったから！だから行こ、な！？」

フランスは必死に説得したがアメリカは聞く耳をもたず部屋を搜索し始めてしまった

アメリカ「ほおらベッドの上に死体が……………」

死体を見つけた途端アメリカは一時停止をした
フランスは額に手を当てため息をついた

やがてその家にアメリカの叫び声が響いた……………

（イタリア・日本チーム）

日本「この家を検索してみましようか」

そう言つて日本が指差したのは周りと変わらない普通の古びた家だ
つた。

つか全員家検索w

イタリア「ヴェー！？こ、怖いよ……………」

日本「大丈夫ですよ、何も起きませんよ……………たぶん」

イタリア「今最後にたぶんって言つたよね？」

日本「だ、大丈夫です！」

日本はイタリアの背中を押して家の中に入った。

家は静まりかえつていて当たらに腐つた食べ物やらが散らかつていた

日本「どうやらこの家は店を営んでいたようですね」

イタリア「くさいよ日本」

日本「鼻つまんでください」

イタリアは鼻をつまむ

日本『ここの住民は流行りの病気で死んだはず……………なのに何故争
つたようにこんなに物が散乱しているのでしょうか……………』

イタリア「鼻つまんでも臭いよ日本ー！」

日本「……………仕方ありませんね、イタリアくんは一回外に出て新鮮な空気を吸ってきてください」

日本はため息をついてイタリアを家から出した。

日本『さて……イタリアくんもなくなったわけですし始めますか』

日本は布で包んでいた刀を取り出し鞘から抜いた。

イタリアを外に出した理由は外の空気を吸わせるだけが目的ではなかった。

日本『さつきからこの家は嫌な気配がしますね……だから安全のためにイタリアくんを外に出したのですが……………』

日本はなるべく足音を立てないように家の中を搜索していく。
どの部屋も物が散乱していて散らかっていた。

日本「……！」

日本は足元にあるものを見て驚いた。

死体だ。

日本「これはここの住人の……………」

日本は死体のほこりを掃う。もう死んでから随分たっているようだ

近くにあった布を死体に被せ日本は隣の部屋の扉を開けた

そこには信じられない風景が広がっていた。

***第十二話 無人の住宅街*（後書き）**

全部のチームが死体を見つけるといふなんともいえないシチュエーション。

話が同じじゃん！というツッコミはなしでww

第十三話 住人の死体

日本「こ、れは……………」

日本は部屋の中を見て驚く。

部屋の中は血で真っ赤に染まっていた。
床や壁などに血が飛び散っている。

真っ赤になった床には無数の死体が転がっていた。

日本は血に触る。もうすでに乾いていた。
日本「どうやらここ周辺には何かがあったようですネ……………」

日本は静かに言う。
立ち上がってその部屋の捜査を始めた。

その様子を黒い影がじっと見つめていた……………

イタリア「うー、服にも匂いが……………」

イタリアが服の匂いを嗅いで顔を歪めた。

イタリア「早くいつもみたいにパスタ食べてゆっくりシエスタできる平和な世界に戻りたいな……………」

イタリアは愛用の白旗の棒の部分を撫でながら寂しそうに呟いた。
そんな時、ふとイタリアはあることを思い出す。

イタリア「そういえば兄ちゃんやスペイン兄ちゃんとか……………今
どうしてるんだろ……………」

ローマノとスペインを含む世界の国々はこの異変が起きてから枢軸・
連合以外まったく見かけていない。

急にイタリアはほかの国々が心配になってきた。

イタリア「ど、どうしよう……………もし敵とかに捕まっちゃってた
りしてたら……………」

イタリアは顔を青くして立ち上がった。もしそうだとしたら今すぐ
助けに行かなくてはならない。そのことを仲間に知らせるためにイ
タリアは足を一歩踏み出した。

ドオオオオオオオンッ！！

イタリアが歩き始めた時、さっきまで自分が調査をしていた家から内蔵まで響くような大きい音がイタリアの耳に届いた。

イタリア「ヴェッ!!?」

イタリアは音に驚き飛び上がる。

家から離れてドイツの所に行こうとしたが中には日本がまだ調査を続けている。

イタリア「ヴェ……………に、日本……………よしっ!」

イタリアは怖くて仕方ない気持ちを抑え家の中に駆け込んだ。

日本「桜の乱舞!!」

日本の周りに大量の桜の花びらが竜巻のように舞い、目の前にいる日本より遥かに大きい敵に飛んでいき、敵の体を包み込む。

しかし敵は簡単に花びらを振り払ってしまっ

日本「や、やはり威力が1番小さいスキルですから強い敵には効かないのでしょうか……………」

乱れる呼吸を整えながら日本は刀を構える。

日本が調査をしている時に突然現れたこの敵は恐ろしい程強く、現在Lv13の日本一人では倒せない相手だった。

イタリア「に、日本ー！！」

日本「イタリアくん！！？」

突然、部屋の扉が開きイタリアが部屋に飛び込んできた。

イタリア「さ、さつきすごい音が……………って、ええええ！！？何コレええ！？」

イタリアは敵を見て叫び声をあげる。

無理もない。この敵、顔がヤバいから。

日本「私達を倒そうとあの顔がヤバい敵が送りこんできたのでしょ。まったく……………普通Lv13の、しかも爺にいきなり襲わせますか！？」

イタリア「日本……………」

敵は唸り声をあげ、攻撃をしてくる。

日本「っ……………！」

日本はイタリアの手を掴み床を蹴って空中に飛び、攻撃を避ける。

日本「イタリアくんはドイツさん達を呼んできてください。私一人ではたぶんどうにもなりません」

イタリア「え、でも呼んでくる間日本は……………」

日本「私は大丈夫です……………っ！！！」

日本は突然、腰をおさえてうずくまる。

日本「よ、腰痛が……………！！！」

イタリア「わああ！！日本、大丈夫！！？」

日本「すいませんイタリアくん。さっき言ったことは忘れてください」

日本は壁を使ってなんとか立ち上がる。

日本「イタリアくん、私のかわりに戦ってください」

イタリア「え！！！？む、無理だよう！だって俺、Lv6だよ！？」

日本「Lv6ならスキルは一つは覚えているはずです。スキルを使

えばなんとか……………」

イタリア「え、えと……………」

イタリアは片手を前に出した。

イタリア「パスタ!!」

スキルの名前を叫んだ途端、イタリアの手は光を放ち日本を包み込んだ。

イタリア「え、あれ？」

日本「どうやら今のイタリアくんのスキルは回復のようですね。ありがとうございます、おかげで腰の痛みがなくなりました」

イタリア「あ、う、うん……………」

すっかり腰の痛みがなくなった日本は満面の笑みで刀を持つのだった。

第十四話 七変化

日本「ふふふ……… ついに私がこの前習得したスキルを明かす時が来ましたね………」

日本が黒い笑みを浮かべる。

イタリア「こ、こわいよ日本………」

日本「覚悟してください！最強スキル『七変化』！！」

イタリアの言葉を無視して日本はスキルを発動させた。

日本を光と風が包み込みイタリアは目を閉じた。

やがて光と風がおさまりイタリアは目を開けた。
そして目の前に立つ日本の姿に絶句した。

イタリア「日本………何それ………」

日本「ああこれは我が国でよくある勇者の服ですよ」

日本はいかにも勇者っぽい服を見にまっていた。
いわゆるコスプレ、というやつである。

イタリア「こ、これがスキル………？」

日本「はい。私が今使ったのは『七変化』というスキルです。様々な姿に変身し、その姿の力を使えるという素晴らしいスキルです」
日本にとっては、だが

イタリア「へ、へえ…………『七変化』だから全部で七つの姿に変身できるの？」

日本「現在は七つの姿にしか変身できませんがレベルがあがっていくにつれて変身できる姿は増えていきますよ」

それじゃあ七変化じゃないじゃん…………、とイタリアは心の中で思う。

イタリア「でつ、でもすごく便利なスキルだね！」

日本「まあそうなんですけど…………どんなスキルにも一つ、弱点があります」

イタリア「弱点？」

日本「はい、このスキルはいつもランダムな姿になるんですよ。つまりスキルを発動させても変身できる姿はランダムなので求めている姿になれる、というわけじゃないのです」

イタリア「た、大変だね…………、ってあれ？日本」

イタリアはさっきの日本の言葉をもう一回思い出す。

日本はさっき「どんなスキルにも弱点がある」と言っていた。つまりイタリアの回復スキル『パスタ』にも何か弱点があるということになる。

イタリア「日本、俺のスキルの弱点って？」

日本「イタリアくんのスキルのですか？」

日本は考え込む。

もう敵は空気状態である。

日本「確か……………イタリアくんのスキル『パスタ』は味方単体のHPを全て回復したりや毒や麻痺などの状態を治すことができる優れものなのですが、そのかわり自身のSPをかなり消費してしまうという感じだったと思われます」

スキルポイント

イタリア「え、そうなの!？」

日本「はい、その証拠に……………ほら」

イタリアは自分のSPを確認した。もう半分以上減っている。

イタリア「うわああ!?!どうしよう!これじゃあもう『パスタ』使えないよ!?!日本を回復できないよおっ!?!」

イタリアは泣きながら叫ぶ。

日本「大丈夫ですよイタリアくん。私はなるべく怪我をしないようがんばります」

日本はイタリアに微笑む。

イタリア「うん……無理、しないでね……」

日本「爺は無理をする元氣がありませんよ。かわりにイタリアくん」

イタリア「ヴェ？」

日本「イタリアくんの武器、弓矢で私の援護をお願いしますか？」

イタリア「あ、うん！」

イタリアが弓矢を取り出し握る。

日本「では、いってきます」

日本はそれだけ言うと剣を構え、空気状態だった敵へと飛び掛かっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5508s/>

* ヘタリアRPG *

2011年11月30日17時50分発行